こゝろの光

壽經の巻

前　篇

無量寿経……一
阿弥陀経……六
十二因縁……七
取……八
希　望……一〇
習慣性……一一
自由意志……一四
人格組織……一七

後　篇

十二因縁……二〇
一心十界……二八

無量壽經（ところ〴〵）

佛陀みろくぼさつともろ〳〵の天人たちに仰せらるゝは、我れいま汝に語る、世間のこと人これを用てのゆゑに坐りて道を得られぬのである。當につら〳〵おもひ計りて衆の惡を遠ざけ離れて其の善きものをえらみてつとめてこれを行ひなされよ。愛欲榮華はいつまでも保つものではない。皆まさにわかるゝので實際たのしむべきものはないのである。佛の在世に曼びてまさに勤めはげむべし。そこでまごゝろあつて安樂國に生れんと願ふものは智慧明達にして功德ことにすぐるべし。きまゝにしてみちにそむき人の後にある勿れ。

○

無量壽如來會に、阿難此義を以ての故に無量壽佛にまた異名ましますいはく無量光無邊光無著光無碍光光照正端嚴光愛光喜光可觀光不可思議光無等不可稱量光暎蔽日光

暎蔽月光掩奪日月光なり。彼光明清淨廣大にして普く衆生をして身心悅樂せしむ。又一切餘の佛刹中の天然夜叉阿修羅等皆歡悅を得しむ。

支謙譯阿彌陀經に、阿彌陀佛の光明は極善にして善の中の明好なり、其快よきことならびなし絶殊無極なり。乃至光明の中の極明なり。極好なり。光明の中の極英傑なり。光明の中の快善なり。

○

また佛陀みろく菩薩に仰せらるゝには、いかにぞや、世上のさまこうではないか。佛陀はみなこれを不愍でたまらぬで、智慧と力とをもてすべてのあしきをば撲滅して悉く善につかしむのである。そこで自己のむかしの思はくをばさらりとうちすてゝ正しき律と教を奉けたもちなされよ。正しき道と聖き規律とを履行して違戻りなさるな。さらばつひにすくはれん。聖き國に入ることをうるのである。佛の仰せらるゝには、汝いまもろ〳〵の天使も人たちもまたは末々の人までも佛陀の聖きおしへと言とを謹かに聞えてからはしかとつく〴〵と思をつくしてよくその中に於て其心を端し行爲を正くなされよ。主上たるものよ、正しき行と正しきつとめとをもて鏡となして其下につくものを率化せよ。言と行との命令として自ら端しくして守れよ。聖者を尊崇し善を敬重し、當にすくひを求めて生死、くるしきやみと、ほろびの本を拔斷しなされよ、さらばまさに三塗の無量のおそれとくるしみいたみにいたるみちを離るべきである。汝等こゝにおいて廣くこゝろと行とに於て道德の本を植えよ。恩惠を布き施惠して正しき道と正しき律とを犯すことなく耐忍と精しきつとめと一心と正しき智慧ともて衝動とすべし。うたゝあひ教化して德を爲し善事をたてよ。正しき智慧と正しき意志にして齊戒清淨なること一日一夜ばかりなるも聖き御國に在りて善を行爲すること百歲なるよりはより勝れたり。其ゆゑはいかにとなればかの佛の御國にては無爲自然にして至眞至善の眞理の靈界なればみな純粹なる至眞善のみにして善と美とに充されて毛髮ばかりも惡しきことはなければなり。

佛陀彌勒菩薩におふせらるゝに、吾汝等に語り聞かせんとおもふ。此世のさま五惡のくるしみなやみをなすことかようでぞある。五のいたみと五のやかるゝ如きのくるしみとはめぐりくる輪の如くに、自らつくりしつみは苦しみとなりて受けなければならぬ。たゞすべての惡きばかりを作して善本をば修めずして、みな悉く自づともろ〳〵のくるしき處に入らねばならぬのである。或はそれが今の世に於て先づわざはひや病をかふむりて、死なんとおもふもできず生ながらへんとおもふもえぬのは、罪惡のまねくところ示にしてひと〴〵これを見つゝあり。また又身まかりぬれば、その行のいかゞに隨ふて三惡道に入るので、苦しみなやみはかりなくして、自らつみのたきものにやかるゝこと、その久しくしてのちにいたれば、また共にめぐりあひてそのうらみをむすびあふ。少しばかりのことより起りて、遂には大いなる惡ともなるのも、そのもとはといはゞ皆財と色との欲望よりして、道德のためには惡み施しなどすることは能はざるによりてなり。くらき欲に迫られ心の意思の欲望によりて、こゝろのなやみにむすぼれて、解けやむことのないのである。利己主義にして、我慾のために己を厚うして、利を諍ひて道德のいかんをゝ顧みることはないのである。權力と豪富榮華などのときには傲慢にして愉快なりとて我憍を逞うしてものに耐忍ぶこと能はざるので道德を修め慈善をせんなどゝは少しも志しはないのである。威勢も榮華もいつまでもあるものでない。

歡樂極て哀情多し。やがて身を勞はし苦におちて久しくして後にはまたはなはだしくなる。天のあみは見へぬが空にはりつめていかゞしても網の目をのがれぬ。自分のわざに相應せる網の目にかゝる。今もむかしもこの理ばかりは卽ち天則はかはることはないのである。痛ましいではないかまたいたましさいかがにおもふやかへり見なされよ。

阿彌陀經（一節）

そのときほとけ長老なる舍利弗等に告げたまはるに　舍利よ、是より日の入るかた十萬の億の國を過ぎて彼處に世界あり。名づけていとたのしき國とぞいはる。彼處にみほとけ在して、阿彌陀と名づけたてまつる。今現に在して常に微妙なる御法をば說きたまふ、舍利弗よ、いかゞやいかに樂しき國と名づけたると思ふぞとならば、その御國のひと〴〵はもろ〳〵の苦しみと惱みとはあることなくして、たゞよろづの樂しきことばかりのところなればかくは名づけたりしぞ。舍利弗よ、たのしき國には七重の欄楯と七重のたからのあみと、七重のならぶ樹とありて、みな四つのたからを以てめぐりおほひめぐりかこみてあれば、彼の國を樂しき國とは名づけたるらめ。

十二因緣

心性唯一染淨の緣に隨て變現して六凡四聖となる。染緣によりて無明十二因緣三界六道に輪廻し、之を六道の凡夫と云ふ。無我無漏の眞智を開發せず。

是無明の闇を本とす。人の性靈光明得るときは還滅の十二因緣生死を出で涅槃に達す。

無始の無明種々の業をつくり業によりて未來の生を感ずる。生の一刹那を識と名づけ苦樂を知るを受と名づけ、境界に於て煩惱を起すを愛と名付け、執著を取と云ひ、未來苦樂の業因定るを有と云ふ。

取

執意は目的に向て行爲要素なり。人は其欲望する目的に執着して捨る能はず。執意は各人の意向によりて善惡種々に岐るゝ所以の者なり。

人は壯年より益老境に一切の事業も成熟し人格も成熟するに隨て其執意する處鞏固と成り其善惡の性格も其行爲も固執的に成る。

人の本質形成の圖式は皆同一なるは顏面の模型の同樣なる如くなれども其精神が因緣によりて益發展するに從つて其理想も益分化し理想の分化に伴ひて其現化せられたる精神益々個々別々に化す。

其精神本質が個體化するに隨て其執する處もまた別々と成る。

六道に趣向する意志の傾向は其人々の執する處によりて別る。

人間の意志の目的が六道に趣向する意志の塑模を造るは善の理想性及其實行

人の理想形式其目的に執意する處の圖式は各人異れり。

人には各個々化する理想ありて活動し而して其人の性質をつくり、それで生活し活動の基礎となる。

人は其意志自由勢力名利等の其の抱持する觀念を敢て實現せんと欲するものなり。

其執する處に向つて實行すると同時に滿足を感ず。また其執する處を實現する爲には勞を厭はず苦を忍び自己の利害生命も犧牲に供するを辭せざるなり。

人の性格を個體化して特殊的に圖式して善惡其終局目的を別にするものは感情にあらずして其執意なり。

人格を人の意志最終目的の價値判斷の標準により

二種に分ち、善の方面に向上するものと惡の方面に向下するものとし各善惡の方に三等とあり。

最高等とは至善の觀念に相當する處の精神と及び行爲とによりて圓滿に道德

其精神に於ても天の如く圓滿に道德心發達し公平無私天の私照なき如く天道的道德は高等なる理想によりて自己の感情意志となして其精神の本質には一點の私なく公明正大智德圓滿なる堯舜禹湯の如く我仁德帝の如し。

彼らは自己の勝他名譽の爲に仁を行ふにあらず。義理人情の動機にかられて慈善をなすにあらず。また其執意によりて各目的に隨つて生活々動するの執意なり。

人間にもまた其品位同じからず。普通國民の義務の觀念によりて自分も人相當の意志として何人にも非難せられず「汝に屬する處のもは汝之を保て吾に屬するもの吾之を保たん。吾人は互に一歩も踏入るべからず」等のごとく人各其分を守る。

希望

人生無常大なる希望も必ず現世に遂げざるあり。世の豪傑の世に容れられず轗軻不遇流離顚沛、種々の艱難を甜め千歲の恨を呑んで露と消ゆるも彼らの希望は空しきにあらず。眞理の望は消へず必ず後生之を繼ぐものわらん。故に其希望は必しも現世に之を遂ると否とを憂へざれ。只眞理なる哉否を研究すべし。キリストが十字架上に露と消るも其希望の光なる敎は世界に千古輝けり。孔子は道德仁義を世に行はしめ人々の望の爲に飢狗とまで謗れしも其意志は道は百世不易。

國家の爲に杞憂し命を萬民の爲に犧げて罪なきに縲紲の身となり自惡にあらずして配處の殘月を眺め身刑せられ九族亡びしもの古今幾干ぞや。然れども其希望せる如くに改革進歩せり。

人は希望の爲に活く。希望遠大にして世界人生に眞の幸福を增進せんが爲に。

習慣性

ベスタロチ著書に一泥工の兒、家貧して食物に窮して其中の年長たる兒が隣の富人の畑より馬鈴薯を窃み取て之を兄弟に分與せしかば死に瀕せる其老祖母之を見て大に

苦慮し其孫の罪を隣人に自告し其許を得て始めて瞑目す。斯る小事に老婆の杞憂過たる如くなれども其習慣性を防ぐ爲には實に大事なりき。

また昔希臘の一賢人其子の小なる過失を譴責するに餘り甚しかりければ其友人が理由を問しに答へて曰く『子もまた習慣を以て瑣細の事となすか』と。其事は一小事なるも其習慣を造るに至つては甚だ害多し。

兒の些細の盜は被害者に取りては重大ならず。然れども兒の窃盜の習性をなすに至ては小事にあらず。屢行ふ時は彼は習慣つひに其性となるに至る。

何人も初より盜賊たらんと欲するものなし。焦眉の急を補ん爲の一回の偸盜はつひに職業的賊の端となる。詐僞を學ばんとして之を試み、酔漢たらんと欲して飲酒を始るものあらざるべし。酔漢ももと一回の泥酔よりつひには泥酔餓鬼に墜つ。第一回は善惡何れにも自由なり。次は奴隷墮落の規則なり。

善に向ふにもまた然り。第一回に自らよく制して犯さざる時は次には初よりは易く抑ふ。つひには力を用ひずして善の習性になる。

善惡六道の分岐點は其誘惑また接導の緣の端緒

次第に進みて愛となり固取して牢强に習性をなす時は執意として全生活を決定す。

習性は決定の其痕跡深き時はつひに回復の望なきにいたる。

一の行爲はまた行爲を繼續し習慣は展轉して其接續する他人に自己の同樣の習慣を得しめ種族の性質とならしむ。

習性に二種二力、模倣と賠償

植物の種子が傳播するに空氣によりて適當の地に落て萠す如く、善惡行爲の種子世界に人の眼耳より其心地に落ちて因緣合する處に發生す。

傳播は賠償。己れ他人より損害を被むれば己もまた他人に損害を被らしむ。日頃正直なる人も市場にて欺れたる人はまた他人に高價に賣付んとするが如きは惡を賠償的にする如く善もまた然り。

家族の中に於て最も激し兩親の受納するものは其子に賠償せらる。善不善の家庭教育もまた共にしかり。

行

偏頗なる一の事業若くは職業に耽る時は偏頗の發展を遂ぐ。

昔は人の生涯單純に想像力活潑に感情は豐富平等に發展せり。

クラインの鐘乳石の洞空中の蜥蜴は視覺を失ふ。これ使用せざる機關の消失するの生物學說。

自由意志

動物は目前の衝動感覺に動かされて自己の意志によりて動くにあらず。獲物を見れば直に從ひゆく自分から思慮をめぐらしてゆくにあらず。思慮し決意して自分から事を成さんとするは人間。人は自己の目的全生活一觀念の統一中に把住して其時に應じてそれ〳〵の事を爲す。

而して良心が自己の感情又行爲を指導して非をさけて正きにつかしむ。之を自由意志と云ふ。

動物は然らず。目前の欲望に左右せられて自己を指導するものにあらず。

人間は自然に規定せられながらそれ以上に逸出して自然を利用し全然規定せらるゝにあらず。自己を把住す其行爲に對して責任ある所以なり。

人間は幼稚にしては自然のまゝなれども成長して人的性を發達して後に自由意志にて自ら善惡をえらびて惡をさけて善をなすにいたる。

小兒は動物と同じく只目前の欲望に驅らる。漸く成長して理性的意志が教育等の緣によりて開發し自ら照しわけて自己の欲望等を抑制して非をさけ善をなすの自由意志となる。

自由意志弱く肉欲などの動物欲を抑制することできず自然のまゝなる劣等なる平凡の人卽ち傍生的性格と云ふ。

良心の力なく動物慾のみ發達し而も其肉慾我慾の病的に墮落するは卽ち餓鬼道性格なり。

自由意志が能く自己の動物慾を訓練して秩序正しきに行はしむ。

卽人の理性意志によりて五欲の情を制し不道德の行は制し人道を全うするものは人性なり。

行爲の結果性格を變ず。

人は善惡ともに一心不斷の修行の結果は天性を變更することを得。天性魯鈍なるも非常の勤勉なる結果つひに天才の英俊を凌ぐほどの偉人擧げて數ふべからず。

身體に於ても天資蒲柳の體質なる者が一心に養成してつひに强大なる體格を成すが如し。其氣質に於ても間斷なく修行の結果は自己を形成することをう。

たとへば夜安眠することできざる折も、即時に眠ることは能はざるも適當なる衞生と勞働とによりて其身體を調練しつひには能く眠ることをう。

たとへば其憤怒は惡性なることを自覺しこの性癖を抑制せんが爲に努むる時は其豫防宜しきを得る時はまた怒を滅するにいたらん。久しく使用せざる機關は消失の理によりて。

人格組織

人格組織は素は稟性、習性——感性、知、活の三大能力合成物にて優勢を占むるもの種々綜合す。

一、情感的人格特性

感性の變則的發展、感性過度知識偏狹精力零、此人は小心病恐怖著し。己の爲他の

爲を憂ひ、謬を恐れ一小失敗に直に挫折す。此人迷信深く猜疑强く悲觀主義。厭世。家庭一小事に錯亂せり。弟の變死を氣にし、海上の　波已を攻擊する爲に押すかに感ず。

二、活動的人性

此持性勇壯快活、何かを企て行はんと身强壯勢力活潑常に成功を疑はず、常に眠食の遑なきまで働き、雜用雜務働いて止まず。ローマのシーザー此人格なり。造次顚沛休止なし。如何なる機會をも利用、進步發展を許り活動熱全身を支配す。勇敢快活彼は動かざれば活ける心地せずと。

三、冥想的　智識的人格

活動の內心に起るもの。知欲の念の念に驅らる。生れながら冥想を樂むあり。幼にして戲を好まず。眞面目の考を起し、大人の如く冥想に耽り高遠の理を考ふ空漠の想を浮べ思索に沈んで萬事を忘る。

カントは此人なり。アルキメデス。ニウトン。スピノザ。ライブニツ。ミランドルモンテキス。マビーオン。アムペール。キニウイン。

四、活動感激的

感激的感情と熱烈なる想像、快心大膽、無謀噴激、剛情狂信、國家の爲め宗教の爲め活動、誠忠を盡し犧牲にし、殉教者殉國者等、

神秘學者のヘテレーズ、フツス

熱烈大辯士十字軍を鼓、

十二因緣

因緣者是十二法展轉能感果故云因互相由藉而有謂之緣、因先に其事無彼より生。緣素其分有て彼に從て起

無明　過去世一切煩惱通是無明。過去未だ智慧光明あらず故一切煩惱起ることを得る故に是故過去煩惱無明なり。

行　過去煩惱に依諸業を行煩業苦三道の中には業道也。

識　倒心を以て欲境に趣く。是中有。先倒心を起して欲境に趣く。彼業力に由て起す所眼根遠方に住すと雖能く所生の父母交會見を見て倒心を現す若男中有母を緣して愛を起し欲心を生ず。若女中有父を緣して愛を起して欲想を生し此に緣に（　）俱起（　）心。又托胎初念を識と云。第二念を名色

大（　）先　中陰交母の所に於て貪愛を生じ愛因緣の故四大和合精血に滴合して一滴と成す。大（　）如カララと名。此カララに三（　）あり。一命　二識　三煩

名色　心は名のみあり。赤白二諦　大論曰、身內欲蟲入和合時男蟲白精如淚而出女（蟲）赤（猶）如吐血出骨髓膏流此二蟲吐（　）らしく出

於父母生婬愛心中有位此中有身設受生有身最初一刹那名識是非婬愛心受生心識名識父母赤白二諦和合宿母腹眼目等六根未具足只如形大（聚）骨肉支節等（　）の位を名色と云

六入　六處共六根具足未辨苦樂別（　）中三十八七日胎中位　六根成就して胎內より出づ

觸　初生より二三才に至る。其間感覺あれども未だ分明ならず。眼等五官未だ發達ぜず、只觸覺のみあり。故に寒熱等に觸れば即ち泣。

○

無明　過去生死輪廻無明を本因とす。生死の眞源を明覺せず。故に自ら生の從來死

の趣向する處を識らず。明覺の神に明覺の光なきがに生死に輪廻す。不覺の神力善惡の行業の因によりて三善三無六道の身を受くるの原因となる。

識　神心に本人畜等の差別あるにあらず唯其の六道の行に由て種々異熟す之を業識と云ふ。

名色　過去の業識母の胎に投ずるを名と名づけ父母の精蟲と卵子和合を色と曰ふ身と心との本なり。

微粒より胎兒漸く發育して、二百八十日全成熟して四支五官等悉圓備するをこと云ふ。

觸　已に胎兒成熟して初めて分娩するとき五官ありと雖眼に見耳に聞く等感覺發達せざる初觸覺のみ感ずる故に觸位とす。

受　小兒の精神は白紙の如く人は過去より將ち來りし資性によるものの後天的の四圍の境遇に緣せられて善惡六道種々に造り出す。

受薰の如何により。

愛　身體成熟して生殖欲の將さに發せんとする時。之を戒る色にありと云ふ時。夫婦の因緣は相共に其性質を薰染ゆくが故に結婚の後は大に其性質を變せしむ。是より成熟して其作す處善惡何れに進むも未來の因となる。

取　愛欲の已に深く熱したるを取と云ふ。已に一家を成して一家圓滿の中に夫婦相親む之は親子相和に思愛結縛し一家骨肉の（　）の取（　）人の心意に

有　人の生涯愛取より生涯作爲したる善惡の業は其神識に結ぶ人の幸不幸の果報となるべき自の因（　）悉くあらや識に所有す。

生　あらや識に善惡業に結合し苦樂の果を受くべき勢力已に有する故に其業因に隨て生を受く。

其生るゝ時は其原因に報いて苦樂の身長短の分

故に老病憂悲憂怖苦惱其業因に（　）

其果は死にあり。死すれば亦後の身を受く。是無明による。

生物

無明　一切生物は根本を一にす。原始生物より進化す人類は生物の進化したる、自ら生の眞源を悟らず妄動の（　）妄動氣あり。

行　境遇の緣に隨つて生物の行業は益々發達し善惡何れにか發達す。原始其行は生存競爭、行は益々自性を發達せしむ。能く行ものは勝（　）ものは劣。

識の行の競爭の勝劣は外部よりは內的生活の精神其（徵）す．

親の身心の發達と否とは其子に遺傳す

其父母の發達せる身心は其子女に遺傳す。其胎兒の身心に遺傳す。

六入　父母より遺傳を因とし胎中の母の境遇と事情（　）養と又其胎兒を善惡に養ふべき緣となる。是胎敎の必要なる所以。

觸　是人は（　）

受　人の父母の遺傳　資性　本白紙の如し

先天の父母遺傳の資性と後天の家庭學校社會の敎育及ひ四圍の境遇は其人を善惡六道種々に鎔化す。人未だ成年期に至るまでは父母の（　）養未だ自己の自由にあらず

愛　人　生物は雌雄（　）爲に生物は兩性の交合によりて種族を保存す、是生欲（　）する所以なり。

夫婦相互の生

兩性遺傳の理、結婚は相選ざるべからず、

取　雄々しき雄が眉根には大威力の面影動き優しき雌が瞳には大慈悲の片影を貯へ

○

受　嬰兒時代　兒の心情の發達順序、嬰兒時代は我々所熾に、一年の兒、母が他兒に乳をやれば嫉て怒る。好で動物を虐る非社會的情が早く發す。之を支配して社會的

に馴すは習慣。理窟はない。（　）化して同情となる。

五六才前は習慣　若し兒を呼て返答するは習慣なり。若し習慣に違ふと直く治。此時代は唯善良なる習慣をつくべし。制裁と叱とは無駄、善い習慣を以つて惡い習慣を排すべし。

幼稚園の終り頃、自分の外に他人ありと思ふ。一緒に遊べば、同時に模擬心發し人の辭儀を見て己も譽らるれば喜ぶ。

道德意識は他律的制裁と賞罰を恐れ、交友の撰が必要、模擬心が行爲を支配する故に忠孝悉く模擬的機械的に敎ふ。

身體健康、生理的に進行、生理的作用、

運動　四大筋肉、肩、胸、下腹脊中、一兩臂の運動、二呼吸、胸部を濶展、血液を循環。

肝要な臂の運動の不足計りでも呼吸が薄弱、血液不循、胸の伸縮壁が濶展せぬ。

腹部の筋肉、肋骨と尻骨盤の中間に横はる筋肉收縮力と腹部機關を（堅）し腹部筋肉には蠕動作用、呼吸と共に有益作用。

消化と呼吸　一は食物の養分より血液を製し一は血液を清淨にす。元氣を補ふ。

背後の筋肉、身體の上部を前後左右に働す。

漫性逆上の人　少し仕事をすれば直に血液が上る。臂と足との運動すれば自然健康となる。朝起ぬけに、晝飯前夕飯前、一番よいのは夕飯前と就寢の時もよし。

血液巡環が目的、此が正しければ健康。

○

行

人の精神精力は身體四支五官を掌りて而して其專ら行ふ處に隨て發達す。專ら頭腦を使用する者は頭惱が發達し其機能は多く使用する方に於て發達す。生物進化の理に於ても生理上の因緣により　營養分を捕獲する目的の爲に便利的に機能發達す。

而してすべての行爲を司る首領者は精神なれば善の業力にしても惡にしても行業によりて其機能が發達す。

使用せざる機能は發達せず。

心理に於ても知力意志のみ發達して感情の發達を妨ぐるあり。或數學者が詩歌の講義を聞くや喜ばずして、こは何をか證明すと問へりと。共日々證明を事とするを以て其佗の事柄に興味を有する能はず。ダニエルは詩歌を感受するの能力は漸々衰滅せる如し科學的智識の一面にのみ發達するは正人君子の正規的發達を遂ぐるにあらず。美の方面、人生の美詩自由の發展を障碍せり。

一心十界

一心十界の說は本隋の天臺大師法華玄義に釋せるを本とす。其後宋の代に天竺慈雲法師始めて一心十界の圖を作れりと云。一心とは衆生心なり。一心に本末あり。本とは如來藏心卽ち世に所謂宇宙精神、佛敎に眞如とも實相とも云ふ。又法身如來藏性とも名づく。宇宙萬物の一大本體にして一切萬有を包含するが故に總該萬有心とも云ふ。如來藏心より發表せられて一切個々の精神と現れ來るを衆生心と云ふ。全身の如來心と個々の衆生心とは其根底を一にす。全體心を根底とする衆生心に理に十界を具し事十界を造ると。

心に迷悟あり。業に善惡あり。一心悟る時は四聖法界と爲り迷ふ時は六凡法界と變ず。合して十界なり。

悟とは心の覺醒卽ち人の眠睡より覺醒せる如く、迷とは無明の眠の中に生死苦惱の夢を結ぶが如し。睡つて夢想と覺たる思想とは一にして異に非ず。若夢覺同一ならば何ぞ夢と曰はん。若其心の體が異ならば夢覺たる時記憶することなかるべし。夢と覺とは心本一にして其相一にあらず。衆生無明の眠覺め廓然として大悟する時卽ち心靈の覺醒なり。

或學者の說に植物は夢れる精神なりと。小兒の心は未だ長者に比す時は人間の精神が覺醒せぬのである。小兒精神と長者の精神との異る如く凡夫の心は聖者の心に比すれば眠より覺めざるなり。聖者の心は已に醒めたるなり。

已に覺たる心に上中下の三品あり。小聖は聲聞、中聖は緣覺、大聖は佛陀なり。

凡夫に善惡の兩面あり。各三等に分ち三善道三惡道此を六道とす。六凡四聖合して卽ち十界なり。

理具十界

理具十界とは衆生心の本能に各十界の種を具せり。たとへば人間の心に十界何れになりとも成り得べき性能が具はれることは、衆生心は白紙の如く、白紙には工なる畫師が心に隨て種々の畫を畫く如く衆生心は心の業に隨て十界何の身と心とも爲るべき理を具せり。又喩ば土偶を造らんには土は本一なれども其塑に隨つて或は觀音の形像又は鬼の偶像ともなるを得べし。人の心性は迷にあらず悟にあらず、善に非ず、惡にあらずして、而も迷悟善惡悉く心性に具はれり。人の心に十界の理性悉く備れり。自己に有せる十界の性の中に就て人一生が緣に隨て業を起し十界の中、地獄を造るべきか天上を現じ出すべき哉は因緣業作に依て十界何れかを造るべき所なり。

人の心に十界を具すのみならず人界に亦其性相を分別する時は人中十界を分つことを得べし

業造十界

人は十界の理を具して而して一生の善惡の因緣に隨て善惡の業を造り十界の中何れかを造り出たす。此には因緣業作を要す。因緣とは因は原因、生れつき持ちたる資性と緣は外より刺戟し助成する緣。因に二種、先天の資性の因と、後天習性の因となり生つきの共人の資質に善に又惡に傾き易き性を有す。故に因緣相應する時は業生じ易し。

三界　二十五有　四州四惡趣六欲梵天四禪四空無想五那含

欲界。飲食、睡眠、淫欲

地獄　ナラクカ　此に苦具、地下故云地獄、八寒八熱大獄各眷屬其數無數　其中受苦者隨其作業各有輕重經劫數其重者一（　）之中八萬四千生死上品五逆十惡者感此道身

畜生。亦旁生此道遍在諸處披毛戴角鱗甲羽毛四足多足有足無足水陸空行互相呑啖受苦無窮愚痴貪欲中品十惡感此道身。婆娑に形旁行旁

强者伏弱飲血啖肉怖畏百端、血途とは相啖　從て名づく。

餓鬼　梵闍黎哆此道亦徧諸趣有福德者作山林塚廟神無福德者居不淨處不得飲食常受鞭打塡河塞海受苦無窮諂誑心意下品五逆十惡感此道身

有德者住花果樹林無德者居不淨處有威德者諸（　）亦有隨生處形或處海渚在人間山林中或似人形或似獸形

重者（　）火飾餞不聞漿水之名中者伺求蓐滌膿血糞穢輕者時薄一飽加以刀杖驅逼塞海塡河

刀塗從被力杖驅逼故

餓口鬼神婆羅門仙　曠野　鬼子母

三類
- 無財　炬口——針咽——臭口
- 少財　針毛——臭　）——大瘻
- 多財　得棄——得失——勢力

阿修羅。無酒無端正無天在海岸海底宮殿嚴飾常好鬪戰怕怖無極在國時懷猜忌心雖行五常欲勝佗故作下品十善感此道身

此神果報最勝は隣次諸天而非天

往昔嫉妬惱佗故常多怖畏妬賢忌行

人道。苦樂相間在因行五常中品十善梵摩菟除此云意人中所作皆先意思。

天道。天とは最勝又天然樂勝身勝

色界、四禪

初禪　覺　觀　喜　樂　一心

二禪　內淨支　喜　樂　一心

三禪　捨支　念支　慧支　樂　一心

四禪　不苦不樂　捨　念清淨　一心支

三無色四。厭色　修四空定生四空天無色全く四大色なきに非ず。楞嚴に四空無身心滅盡定性現前無華果

聲聞界

先覺者たる佛陀の敎を聞て其指示に隨て修行し道果を得を云ふ。聲聞は四諦の理を觀じて眞空無爲の理を證して涅槃を得。

四諦は苦集滅道。苦は三界六道生死の苦の原理を諦かに認識て下地獄より非想天に至るまで苦樂不同なりと雖どもまた生しては復死し死已て還生するを免れず。此眞理を諦かに觀じて承認す。

集諦とは見思の惑卽ち衆生所具の煩惱なり。見惑とは身邊邪取戒貪瞋痴慢疑此惑は理を見るの謬誤より生ず。

思惑に八十一品あり。三界の九地　欲界を一地とし四禪四定を八とし九地各九品あり。

其思惑とは貪瞋痴慢なり。此煩惱は肉體に生理上自然に具はれる惑なり。

此惑は有爲有漏の生因なり。此惑に因て業を執し生死の果を受く。

三滅諦。前の煩惱と苦果身と滅して眞空涅槃の理を顯はす故に涅槃は法性（自大而然）集も染する能はず。苦も惱ます能はず。道も通する能はず。滅も淨むる能はず。

却煩惱已乃見法性。

四道諦　略せば則ち戒定慧廣即三十七道品、道とは涅槃に達する故に。

四念處。一身は不淨、受は苦、心是無常、法無我なりと觀ず。
四正勤。一未生惡令不生、二已生惡令滅、三未生善令生、四已生善令增長
四如意足。欲念進慧
五根
聲聞の二位、一凡位、二聖位
外凡、五停心、別相、總相、
內凡、煖、頂、忍、世第一、

內凡四善根內凡加行位漸法性を見て心理內に遊ぶ、身有漏に居して聖道未生故內凡と云ふ、定を修して慧を開く爲め巧用の行を加ふ。故に加行と曰ふ。
煖位頂位欲界四諦十六行相を修す。
忍位（　）二界欲界四諦八諦三十二行
一行一刹那盡滿位卽入世第一
世第一法　一行一刹那卽入見道。
次聖位三
見道。世第一の後心苦忍眞明八諦の下に八忍八智を發す。總十六心　十五心を見道と名づけ初果向十六心は修道効果なり
一須陀　八十八見惑を斷じて眞諦を見て聖位に入る。故に預流。
二斯陀含　一來と曰ふ。欲界九品の思を斷ずる中前六品を斷後三品あり。猶一來す
三阿那含　不來と曰ふ、欲殘思と斷盡進上八地の思を斷ず
四阿羅漢　無學又無生見思斷盡支縛已に斷じて果縛尙在を有餘涅槃灰身滅智を無餘涅槃と曰ふ。
緣覺亦獨覺　迦羅
緣覺は內の十二因緣を觀ず。佛の敎法を稟く。獨覺は外の因緣を觀じて無師自悟す

獨覺と部行麟喩、仁王經に釋尊出世五百獨覺山林より來て佛所に至る。
雖値佛樂獨善寂故
十二因緣を觀じて生死の源を滅し無明滅すれば行滅し乃至老死滅　眞諦の理を覺る。
因緣の生滅を觀じて眞空を覺悟
獨覺は無佛世に出で獨り孤峯に宿し物の變易を觀じ自ら無生を覺、見思の惑を斷じ更に習氣を（侵）すを聲聞に（過）たり。
菩薩
初發心より四諦の理を緣し四弘誓願を發し六度の行を修す。

昭和六年八月廿五日　印刷　　昭和六年八月廿八日　發行
誌代郵稅共　年貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷人　小林七太郎
牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷所　靜文社印刷所
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番